リボー先生の想ひ出

野上俊夫

最近數年間に心理學者の訃を聞くことが可なり多い。佛のビネー、獨のエッビングハウス、キュルペ、モイマン、米のジェームス、ミュンステルベルヒ等は其の重なるものであるが、最近に傳へられたる佛のリボー老教授の訃音は、此等數氏の死に比して寧ろより以上に惜むべきことである。

テオデュル、アルマン、リボー(Théodule Armand Ribot)は千八百三十九年、佛國のコート、デュノール州(Côte-du-Nord)のガンガン(Guingamp)といふ小さい町に生れた。佛國の西北の一角が海中に突出して英國海峽とビスケイ灣とを分つて居る、其の突角の中にあつて北方英國海峽に面して居る地方である。夙に心理學特に其の實驗的方面の研究に着手して、少時より名聲を揚げ、一八七六年には其の機關として哲學評論(Revue philosophique)を創刊し、一八八八年にはコレーヂ、ドフランスの心理學の教授となり、一九〇一年に退隱してその名譽教授の稱號を得たが、哲學評論の編輯は依然として之を司り、又一方學問上の研究も晩年に於いて續々發表せられて、其の意氣壯者を凌ぐものがあつた。然るに最近兎角健康がすぐれず、殊に昨年の始に眼疾を得て手術を施したる爲めに、人との對話などに頗る困難を感じたらしかつたが、遂に今回の訃音に接した次第である。

云ふまでもなくリボーは佛國の新心理學の父

で、獨逸のヴントと同じ地位に在り、年輩も亦殆ど同じである。學風は實驗的と稱せられて居るが、併し佛國に於ける實驗心理學といふ語の意義は、獨米に於ける此語の意味とは餘程異つて居て、むしろ經驗的心理學といふ方が當つて居るやうに思ふ。リボーも矢張り此の流れに屬して居て、今少し適切なる語を以ていへば發生的心理學といふのが一番よくはないかと思ふ。即ち英國のベインやスペンサーの流れを汲んで米國のジェームスやスタンレー、ホールの考へと響應して居る所があつた。隨つて獨逸の心理學、特に主知的のヘルバルト等の心理學とは最多く相容れなかつたと思ふ。即ち心の現象を唯それ自身に就いて研究するといふよりも、むしろ更に廣い見地に立つて、心の現象を一般の生命の現象と關係せしめ、その一々の作用の研究と共にそれが何故に生物に對して必要となつたのであるか、或は生物に對して如何なる役目を有するものであるといふやうな方面に着目して居る。隨つてリボーの研究は感覺、觀念、記憶といふ如き知的方面に關するものは極めて少くて、精神生活の根本的な深い部分たる情意的方面に限られて居た。殊に感情及び情緒の研究は氏が一生の心血を傾けた所で、此の著書の半ばは此の方面に關して居る。其の最も主なるものは云ふまでもなく一八九六年に著れた『感情の心理』(La psychologie des sentiments)で、其の翌年に既に英譯になり、最も廣く讀まれ、原書は一九一四年に既に九版を重ね、此の方面に於ける第一流の著である。其の他一九〇五年に現れた『感情の論理』(La logique des sentiments)、一九〇六年の『熱情について』(Essai sur les passions) 一九一〇年の感情心理學の諸問題』(Problèmes de psycologieh affective) はいづれも『感情の心理』を補ふものと見るべく、同一の方面を飽くまで追究して倦まざ

る學者の面目を見るべきである。

佛國に於ける實驗心理學の意義は、獨米等に於けると聊か相違する所があると前に述べたが、佛國の學者は、心理學に於ける最上の實驗は、自然がやつてくれる實驗を觀察記載するに在ると考ふる人が多い。自然のやつてくれる實驗とは卽ち精神の變態若しくは病態で、卽ち廣義の精神病である。リボーの後任として目下コレヂ、ド、フランスの敎授たるピエル、ジャネー氏の如きは極端に此の考へを主張して居り、精神病の研究以外に心理學の實驗は無いと云つて居る。隨つて佛國の心理學者は同時に精神病學者である事が甚多い。リボーは精神病學の敎授にはならなかつたやうであるが、初年の著には精神の變態に關したものが多くある。『意志の疾病』(Les maladies de la volonté)『記憶の疾病』(Les maladies de la mémoire)『人格の疾病』(Les maladies de la personnalité)等はいづれも小册子ではあるが、皆英譯にもされて廣く讀まれて居る。

其の他リボーの發生的又は進化論的傾向を窺はしむるものは、早く現れた『心的遺傳』(L'hérédité psychologique)及びエスピナス(Espinas)と共に譯したハーバート、スペンサーの『心理學原理』がある。又氏の意志的運動的方面を重んじたることを知らしむるものは『ショーペンハウェルの哲學』(La philosophie de Schopenhauer)及び『無意識生活と運動』(La vie inconsciente et les mouvements)とがあり、又幾分か知的意識的方面の研究を目すべきは『注意の心理』(La psychologie de l'attention)『創始的想像について』(Essai sur l'imagination créatrice)『一般觀念の進化』(L'évolution des idées générales)がある。又その壯年時代の二大著述とも云ふべき『現今の英國心理學』(La psychologie anglaise contemporaine)『現今の獨逸心理學』(La ps-

ychologie allemande contemporaine）は夙に英譯にもなつて日本などにも廣く讀まれて居る。

在來の日本の心理學界には、主として獨逸及び米國の心理學が紹介せられ、新心理學或は實驗心理學といへば、種々の器械を用ひて主として感覺又は初歩の知的作用の研究をなすことなりといふやうに解せられて居る傾向がある。之れは或は『實驗』といふ語だけに對しては寧ろ相當して居ると見るべきであらうが、新しい心理學がたゞ此の方面のみといふやうに解するものが萬一にもあらば、それは大なる誤りであつて、新心理學は遙かに廣い範圍を有して居るものである。殊にその中に就いて我がリボー教授によつて代表されて居る感情の研究は、米のスタンレー、ホールによつて代表されて居る發生的心理學と相並んで、在來我が國に主に紹介されて居た狹義の實驗心理學の缺を補ふものとすべく、將來の我が國の心理學は益此の方面に研究の歩を進めねばならぬと思ふ。

昨年の二月の初、巴里の町にも雪が少しく積んで居て吹く風寒き日、コレヂ、ド、フランスのすぐそばの學校町（Rue des Ecoles）二十五番地のリボー先生の宅を訪問した。四階の階段を漸く昇り盡して刺を通じ、客間に通さるゝと、間もなく先生は出て來られた。普通寫眞では四五十代の先生の像のみを見て居たので、今眼の前に見た先生が非常に年をとつて憔悴して居らるゝのを見て、一時は別人かと疑つた位であつた。丈は佛國人としても低い方で身體も一體に小さく、殊に數日前眼の手術を受けられたそうで歩行にも困難して居らるゝらしく、自分の家ながら壁や椅子などを手に探りながら入つて來られ、椅子を予の膝のすぐそばに引きよせて話された。それに老人によくある病氣であらうが首が絶えず左右に振れて居る。隨分衰へられたものだと思つて、或はそれ以後あまり長

生されないのではないかなどゝ心配をした。併し話しは矢張り中々しつかりして居て、折角佛國に來てくれたのに此戰爭中で頗る氣の毒に思ふことなどから、自然話しは戰爭の事になつて、當時佛國民の氣遣つて居たヴェルダンの戰爭も今はさぞで心配でも無さゝうで喜ばしい事、又その頃に現はれたモルトン、プリンス氏の『カイゼルの心理』といふ書物を讀んだ事を話されて、プリンスがカイゼルを狂者だといつたのに大に喜んで居らるゝ樣子であつた。前に日本に駐在して居た佛國大使のジェラール氏が此の近くに住んで居るから一度訪問して見たら面白からうと云つて、予を自分の書齋に導き、ジェラール氏の住所を覺束ない眼附きにて『哲學評論』の原稿紙に書いてくれられたが、それから一年ならざるに、予の前の心配は偶然にも適中して、今回の訃音に接し、『哲學評論』の原稿紙の紙片は予にとつて實に尊き紀念となつてしまつた。

附記。リボー教授は昨年十二月八日七十七歳の高齡を以て巴里に歿せられたとの事である。